

志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記 大国主命の国譲り」 要約（その12）

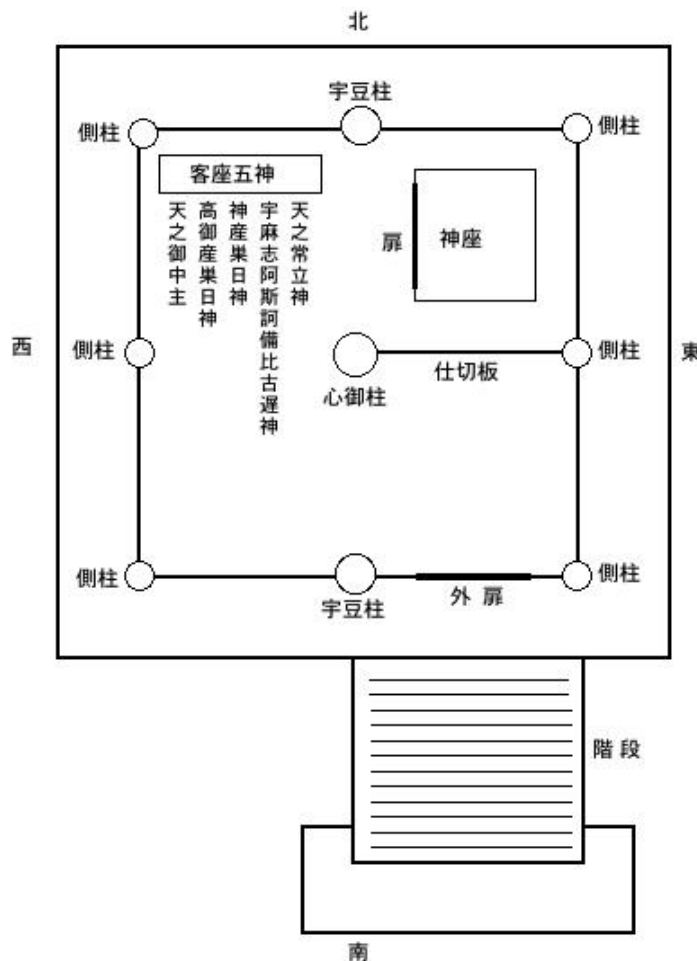
松田 武

“古事記 大国主命の国譲り” シリーズ（その11）にて、大国主神の国譲りがどのような根拠に基づいて行われたについて、古事記の作者の観点から、即ち、古事記の筋書きの上から、読み解くことを試みました。そして、その背景にあるのは、聖徳太子の17条の憲法第一条「和を以て貴しとなす」という日本古来の“和の精神”にあった、という綺麗な結論に達しました。

しかし、釈然としないものが残ります。大国主神は巨大な神殿を建ててくれれば、遠い幽界に隠退致します、と言って国譲りを承諾しました。では、現在その神殿、即ち出雲大社本殿はどのような形に造られ、大国主神はどのように祀られているのでしょうか。

1.4. 出雲大社における大国主神の祀られ方

(1) 出雲大社本殿における神々の配置



大国主神の御神座は上記平面図の通り、拝殿のある方向、即ち南向きではなく、西を向いて配置されております。一般の参拝者は拝殿より参拝しますから、大国主神の横顔に向かって参拝することになります。率直に言えば、大国主神は参拝者に対してそっぽを向いているような配置であります。

大国主神の御神座は、一般参拝者からは容易に観ることは出来ませんが、御神座が西を向いていることは、秘密ではなく、観光案内の書籍にも記載されております。そして、本殿西側の扉には、御神座正面礼拝所なるものも設置されており、熱心な参拝者は御神座正面礼拝所まで足を延します。

何故大国主神の御神座は西を向いているのか。その理由として以下の説が世に語られております。

- ① 神々を迎える海上の彼方を見ている。
- ② 本州の西南を守護するため
- ③ ご本殿内でお祭りすることを目的として作られているため、参拝者が外から拝むことを前提にしていないから

など、諸説ありますが、真偽のほどは謎に包まれているというのが実態のようであります。ともあれ、上記平面図をみれば分かるように、御神座の左側（拝殿側）には板仕切りがあり、一般参拝者の祈りを遮っているような形式になっております。

さらに、ご神座の前方には「御客座五神」が祀られております。この五神とは、上記の図では若干不鮮明ではありますが、このシリーズまとめ1で述べました「別天津神（ことあまつかみ）」であります。具体的には 天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巢日神（たかみむすびのかみ）、神産巢日神（かみむびのかみ）、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこじのかみ）と天之常立神（あめのとこたちのかみ）であります。

御客座五神は南向きに祀られておりますので、拝殿に立つ参拝者は、御客座五神に向かって礼拝する形式になっております。

御客座五神は高天原に最初に現れた神々で、会社で言えば会社創業時の取締役のような立場で、八百万の神々の頂点に立つような重要な神々である、と言えます。その重役さんたちが、言わば個室におられる大国主神が出てこないよう、しっかり目を光らせているようにも見えます。

(2) 注連縄（しめなわ）の設置方法について

出雲大社の注連縄は巨大なことで良く知られています。

- ① 拝殿の注連縄 長さ： 6.5 m 重さ： 1 t
- ② 神楽殿の注連縄 長さ： 13.6 m 重さ： 5.2 t（日本最大級）

この注連縄は大きいだけではなく、設置のされ方が他の神社と異なっております。即ち、注連縄の縋り（より）始めの位置が向かって左側、縋り終わりの位置が、向かって右側になっております。話は少しややこしいですが、ご本尊から見て右側に縋り始めがあり、左側に縋り終わりがあるということです。

古来、主宰者から見て左手側の方が上位となります。帝を中心にして、左大臣は右大臣より上位の役人です。芝居の舞台でも、観客席から見て右の方が上手（かみて）、左の方が下手（しもて）であります。川は上流から下流に流れます。



拝殿の注連縄

出雲大社の注連縄は川の流れとは逆に、下流、即ち下手から縋り始められております。（実際は縋り始め部分を下手にして設置されている、ということです。）これは着物に譬えるならば、左前に着物を着せたような状態と言えるでしょう。

（3）出雲大社拝殿での参拝作法

一般の神社での参拝作法は、お賽銭を入れた後、“二礼二拍手一礼”となっております。しかるに、出雲大社での参拝作法は、お賽銭を入れた後、“二礼四拍手一礼”となっております。この参拝作法は「るるぶ」の観光案内書にも記載されております。

この四拍手は何を意味するのか。四は“よん”とも読み、“し”とも読みます。“し”は音として“死”をイメージさせます。

（4）出雲大社と“釈然としないもの”との関係

何度も釈然としない、と筆者は唱えて参りましたが、その釈然としないものとは、いかなるものか。

- ① 大国主神側は大きな神殿を建てて貰うことで、本当に納得して国譲りを行ったのか否か。
- ② 高天原側は“大国主神の国譲りは当然のことである”と大国主神に迫ったのであろうか。内心忸怩たるものはなかったのであろうか。この二つの疑問符に対して、出雲大社は答えてくれております。即ち、
 - イ． 大国主神はやはり全面的に納得して国を譲ったのではなかった。一方で
 - ロ． 高天原側も大国主神が納得していないということを理解していた。

ということが、出雲大社の構造、参拝方法に関する上記（1）から（3）の説明で分かるので、あります。

大国主神は苦勞して立派に育て、治めている葦原の中つ国を、高天原側に譲ることに、全面的なる納得が出来なかったとしてもおかしくはなく、また、そこにいささかの「怒り、恨みの念」を抱いた、としても不思議ではありません。

それを知っている高天原側は、その大国主神の「怒り、恨みの念」が世に現れて「祟り」が生ずるのを防ぐ必要がある。それが、前述「本殿平面図」の通り、出雲大社の御祭神である大国主神を封じ込める形式となっていることで、よく分かります。

さらに、注連縄、着物の左前の着方と同様に、左右反対に設置することで、ご本尊にお鎮まり頂き、そして一般参拝者の参拝作法でも、四拍手を用い、参拝者はそれとは意図していないけれど、参拝の都度、ご祭神にお鎮まりを意識して頂く形式になっております。

15. 出雲の国造家

(1) 千家（せんげ）氏と北島氏

国造（くにのみやっこ、こくぞう、こくそう）とは、古代日本の行政機構において、地方を治める官職の一種、また官職に就いた人のことであり、軍事権、裁判権などを持つその地方の支配者でありました。しかし、大化の改新以降は主に祭祀を司る世襲制の名誉職となりました。

現在では、出雲国造は千家氏と北島氏の二つに分かれております。もとは一つの“出雲氏（いずもうじ）”で、14世紀、南北朝の時代に北島家が分家しました。両家で出雲大社における年間の祭祀を分担していますが、重要な祭祀は本家の千家家が担当されておられます。

(2) 出雲氏の始祖

国譲りに応じた大国主神を祀るため、天日隅宮（あめのひすみのみや＝出雲大社）の祭祀を担った「天之菩卑能命」（あめのほひのみこと）が出雲氏の始祖であります。その子神・建比良鳥命（たけひらとりのみこと）を第2代としております。

（古事記引用：故、此後所生五柱子之中、天菩比命之子、建比良鳥命此出雲國造・无邪志國造・上菟上國造・下菟上國造・伊自牟國造・津嶋縣直・遠江國造等之祖也）

「天之菩卑能命」は本シリーズまとめ3において述べられた通り、天照大御神の第2番目の御子（ご次男）としてお生まれになった神であります。

そして、まとめ9において述べられた通り、天忍穗耳命（ご長男）が天照大御神より天降りする詔を得たにも拘わらず、葦原の中つ国に荒ぶる神々がたくさん存在すると観て、天降りするのを躊躇されました。そこで、「天之菩卑能命」は（ご長男に代わって）大国主神と国譲りの交渉するため、最初に派遣された神であります。

(3) 天日隅宮の祭祀とは

国譲りの後、「天之菩卑能命」が天日隅宮（出雲大社）において大国主神を祀る任を与えられたことに、この国譲りが、やはり、高天原側にとって、内心忸怩たるものがあつたことの現れではないか、と筆者は観ております。

俗っぽい表現することをお許しいただけるのであれば、“大国主神を祀るため、天日隅宮（出雲大社）の祭祀を担う”とは、戦勝国占領軍の総司令官のような立場となって、大国主神を監督する役割を果たす、と同時に、全権を持って大国主神をお守りする役割を担った、ということになります。

（４）「天之菩卑能命」の任命とは

まとめ9で述べられたように、「天之菩卑能命」は大国主命に会って見たところ、大国主神は決して荒ぶる神ではなく、大変な傑物と分かり、その威厳、人柄に魅せられて、使命そっちのけで、大国主神に付き従った、ということでもあります。（原典：故、遣天菩比神者、乃媚附大國主神、至于三年、不復奏。訳：天菩比神は派遣されたが、大国主神に媚び附いて、3年間復命しなかった。）

「天之菩卑能命」は“大国主神崇拜者”であった、と窺えます。

従って、「天之菩卑能命」およびそのご子孫による天日隅宮の祭祀はたいへん心が籠もって、行き届いたものであつたことでしょう。高天原側は天日隅宮の祭祀担当に最も相応しい神を任命した、と言えます。それくらい、大国主神の無念の心に慮つた、ということになります。

（注） 出雲氏が初めて出雲国造に任じられたのは『先代旧事本紀』によれば、第12代宇賀都久怒からであるが、千家家の伝承をまとめた『出雲国造伝統略』によれば、第17代出雲宮向からであると言われております。また、『旧事本記』に収められている「国造本紀」には、第十代の崇神天皇のときに、天之菩卑能命の十一世の孫宇賀都久怒を出雲の国造に任ずると定めたとしております。

出雲の国造家は京都で誰が実権を握ろうが、誰が天下人になろうが、その地位は脅かされませんでした。そして、天照大御神のご子孫として、出雲地元の人々はもとより、全国の人々から尊崇を集め、今日まで連綿と出雲大社の祭祀を司り、大国主神の神徳を祀って来られました。

（続く）

出雲大社における大国主神の祀られ方を観ると、大国主神は一見亡くなった神として出雲大社に封じ込められているように窺えます。もし封じ込められているので

あれば、お詣りしても何の御利益も得られないことになってしまいます。しかしながら、出雲大社は全国的に人気のある神社の一つであり、多くの参拝者が訪れておりますから、もちろん御利益がある、ということになります。

封じ込められているにも拘わらず、なぜ御利益があるのか、次稿ではその理由について、筆者流に探ってみよう、と考えております。

このまとめもマラソンで言えば40キロメートルを過ぎた辺りまで来ました。そこで、1月の講演およびこのまとめ作成に使用した参考文献を下記いたします。

- 倉野憲司校注 『古事記』 岩波文庫 岩波書店 1963年
谷口雅春 『古事記と現代の予言』 日本教文社 1968年
司馬遼太郎 『歴史の中の日本』 中公文庫 中央公論新社 1976年
井沢元彦 『逆説の日本史[1]古代黎明編』 小学館文庫 小学館 1998年
関裕二 『古代史【謎解き辞典】』 三修社 2004年
福永武彦訳 『現代語訳 日本書紀』 河出文庫 河出書房新社 2005年
寺川真知夫 『三輪山の大神主神さま』 東方出版 2010年
西條勉 『『古事記』神話の謎を解く』 中公新書 中央公論新社 2011年
鎌田東二 『古事記ワンダーランド』 角川選書 角川学芸出版 2012年
中野晴生 『出雲大社 平成の大遷宮』 2013年
島田裕巳 『「日本人の神」入門』 講談社現代新書 講談社 2016年
渡部昇一 『「日本の歴史」第一巻 古代編 神話の時代から』 ワック 2016年
奈良毅監修 『全解 絵で読む古事記<上巻>』 富山房インターナショナル 2017年
大山誠一 『神話と天皇』 平凡社 2017年
富安陽子 『絵物語 古事記』 偕成社 2017年
高橋俊宏編集 『伊勢神宮と出雲大社』 樫出版社 2017年
津田左右吉 『古事記および日本書紀の研究』 毎日ワーズ 2018年
吉田大洋 『[新装版] 謎の出雲帝国』 ヒカルランド 2018年
坂井洋一 『天皇家と日本人 1300年間の呪文』 ヒカルランド 2019年
三浦佑之 『出雲神話論』 講談社 2019年

上記著者の先生方に心より御礼申し上げます。